

春秋秦国における青銅器生産の始まり

鈴木 舞（東京大学）

1. 本研究の目的

春秋時代の各国が青銅器祭祀を始めとした周の礼制を継承したことはよく知られる。秦の領域内でも、数多くの青銅器が墓の副葬品として出土しており、西周の青銅器祭祀を容・継承したことが伺われる。一方、こうした青銅器の需要を支えた製作レベルの動向については、現状十分な検討は行われていない。

甘肅省礼県に位置する大堡子山遺跡は、1990年代初頭から「秦公」銘青銅器の出土地として知られ、また当地で中字形墓2基（全長115m、88m）が発見されたことで、「秦公墓地」として知られるようになった（戴2000ほか）。両墓は、西周後期から春秋前期に当たる、秦仲から憲公までのいずれかの秦公、或いはその夫人の墓とされる。

本報告では、大堡子山墓地から出土したとされる「秦公」銘青銅器群に着目し、その製作時期及び金工技術についてこれまでに公開された情報を再整理する。それを踏まえて実物の観察も行い、西周期の技術と比較することで、春秋秦国における青銅器生産の始まりについて、考察することを目的とする。

2. 秦公諸器の製作年代（図1）

現在、秦公墓地出土とされる青銅器は鼎10点、簋8点、方壺7点、円壺2点、甬鐘4点、罍3点が知られる。最初にその年代について検討する（図1）。

円鼎 西周後期の円鼎（図1-①）は腹が浅く、器腹と底部の境目はやや角ばり、底部は丸みを帯びる。これに対して、秦公諸器の円鼎は、器腹と器底の境目は丸みを帯び、器底が平らになる。秦公鼎の中でも、首陽斎蔵品（図1-②、同形器3点）と上海博物館蔵品（図1-③、同形器2点）では、後者の方がより平らな器底をもつ。両者の文様に目を向けると、両者ともに窃曲文であるが、前者の主文は凸面で表現され、その外形線は明瞭で滑らかである。主文（凸面）の周りには、微細な凸線で雷文が充填される。一方、後者は主文の外形線が歪み、主文内の沈線が途切れる。地文はない。

簋 西周後期（図1-④）はやや下膨れの腹部であり、蓋は丸みをもつ。一方、秦公器（図1-⑤⑥）の腹部は丸く、最大径が器身中段にある。蓋は少々角ばりをもつ。両者には時期差が認められる。とりわけ、図1-⑥は丸みを増す。文様に目を向けると、図1-④と⑤はともに、蓋上部・頸部に窃曲文、腹部に瓦文、圈足に瓦文がそれぞれ立体的に施され

る。図 1-⑥の腹部には、沈線により垂麟文が表現される。

この他の器種の秦公諸器（方壺・円壺・甬鐘・罍）も、その測視形は西周後期の同形器との違いが認められる。以上より、秦公諸器は、西周後期よりは年代が下るものであり、春秋初期に位置づけることができると考える。加えて、円鼎・簋の検討からは、秦公諸器の中に、さらに早晩の 2 段階が存在すると考える。

3. 銘文について

秦公諸器ではいずれも、器表面に、「秦公乍寶（用）X」或いは「秦公乍鑄（用）X」という銘文が施される。多くの先行研究では、両者の内容の違い、「秦」字の字体の違いとその変遷、用字法の違いから、時期差を認めている（李 2011 他）。「秦」字に関し、「禾」2つ及び「春」字から成るものを「秦_A」、「禾」2つ及び「春」字から成るものを「秦_B」とすると、1 で検討した早い段階の円鼎及び簋には前者の銘、遅い段階の円鼎及び簋には後者の銘、また方壺・円壺・甬鐘・罍にはいずれも後者の銘が施される。これらをそれぞれ「A 群」・「B 群」と称する。

4. 秦公諸器の製作技法

(1) 器本体と文様の製作

秦公諸器は、鑄造技術という観点からは、次のような特徴が挙げられる。

円鼎 A 群（図 1-②、図 2）は、原型では主文を面的に貼り付けた上で、主文内に沈線を陰刻し、これを外型に転写させた上でさらに外型上で地文を陰刻するという 2 段階の施文が行われる。各文様の外形線も明瞭である。一方、B 群は、原型上のみで施文、刻線の幅・深さは不安定である。また外型の合わせ目のズレが認められる^註。

簋 A 群（図 1-⑤）は、器物本体の分鑄技法や、文様は原型上で立体的に作られたこと、外形線の安定など、西周後期の技術と類似する。一方、B 群（図 1-⑥）は、例えば文様は原型に垂麟文を陰刻したのみであり、簡略的なものである。

方壺 器表面や文様上に、外型同士のズレによって生じた段差が明瞭に見てとれる。合范線も器表面に残存する。文様沈線が途中で途切れており、原型上での陰刻の不安定さが窺える。器表面全体に鑄巣が多数認められる。

円壺 把手は鑄造後の嵌め込みであり、把手を先鑄しない点で当該期の一般的な製作工程と異なる、腹部に補鑄が見られる、器底の湯口が未処理など、報告者により鑄造精度の低さが指摘されている（李 2004）。

罍 扉稜や龍文が立体的に鑄出され、基本的な造形は西周後期のそれと変わらない一方、鑄型の合わせ目に生じた鑄バリが処理しきれていないなど粗さが見られる。

このように、A 群の鼎・簋は西周期の製作工程・技術に近く、一方、B 群には技術上の簡略化や稚拙さが認められる。

(2) 銘文の製作

A 群の同形同銘器は字体・字形が統一され、施銘箇所と周囲の器壁の間は滑らかに連続する(図3)。一方、B 群では、同形器中での字体の違いや欠画(「鑄」字)、施銘の倒置(方壺)や、また施銘箇所と周囲の器壁の間にはしばしば段差が認められる(各器種)(図4)。A 群と B 群との間には、識字の差、銘文范の嵌め込み技術等を含む、施銘のあり方の違いが認められる。

5. 考察

以上の検討により、大堡子山遺跡出土とされる秦公諸器は春秋初期の所産であり、また2つの時期に分類できると考える。なおかつ、早い段階の A 群の製作技術は西周期のそれに類する一方、それより時期の下る B 群は技術上の簡略化や稚拙さが縷々認められ、施銘においても識字や技術が A 群とそれとは異なることが分かった。

これらの観察結果から推測するに、A 群は西周の青銅器製作工人によって作られたもの、B 群はこれを模倣したものではないだろうか。西周末期から春秋初期の社会混乱を考えると、A 群とは周の青銅器工房から秦の地に逃れた工人らによって製作されたもの、また B 群はその次の世代に、在地の工人が A 群を模倣して製作した可能性が高いと考える。

付記 本報告は、JSPS 科研費(19K13405)による研究成果の一部である。

註 上海博物館でのガラスケース越しの観察による。以下、4(1)での検討は、李(2004)によった円壺に見られる製作痕跡以外の記述は、すべて報告者の同館での観察所見に基づく。

引用参考文献

呉鎮峰 2008 「近年新出現的銅器銘文」『文博』2008 年第 2 期

呉鎮峰編著 2012 『商周青銅器銘文暨図像集成』上海古籍出版社

呉鎮峰編著 2016 『商周青銅器銘文暨図像集成続編』上海古籍出版社

戴春陽 2000 「礼県大堡子山秦公墓地及有関問題」『文物』2000 年第 5 期

李朝遠 2004 「倫敦新見秦公壺」『中国文物報』2004 年 2 月 27 日

李峰 2011 「礼県出土秦国早期銅器及祭祀遺址論綱」『文物』2011 年第 5 期(李峰 2018 『青銅器和金文書体研究』上海古籍出版社に再掲)

礼県博物館・礼県秦西垂文化研究会 2004 『秦西垂陵区』文物出版社

図版出典

図1 ①河南省文物考古研究所ほか1992『三门峡虢国墓』文物出版社、②呉2012:01558、③呉2012:01556、④呉2012:05366、⑤呉2012:04251、⑥首陽齋ほか:48

図2 首陽齋ほか:45

図3 呉2012:04251、中:呉2016:0334、右:呉2016:0335

図4 ①左上:呉2012:01556、右上:呉2012:01562、左下:首陽齋ほか:49、右下:呉2012:04387、②呉2008、③呉2012:01563

	円鼎	簋
西周後期	 <p>①三门峡虢国墓地M1753:1</p>	 <p>④師袁簋(上海博物館蔵)</p>  <p>器底(蓋も同銘)</p>
秦公諸器	 <p>②首陽齋蔵品</p> 	 <p>⑤上海博物館蔵</p>  <p>器底</p>  <p>蓋</p>
	 <p>③上海博物館蔵品</p> 	 <p>⑥首陽齋蔵品</p>  <p>器底</p>

図1 秦公諸器の分類と年代

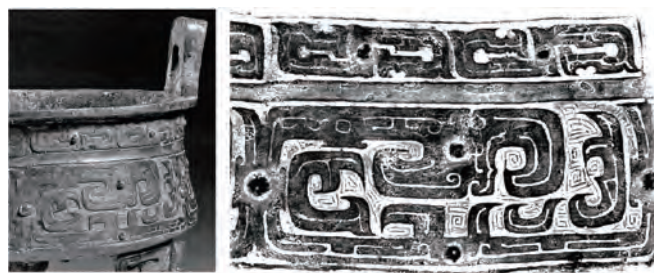


図2 秦公円鼎A群の文様拡大図

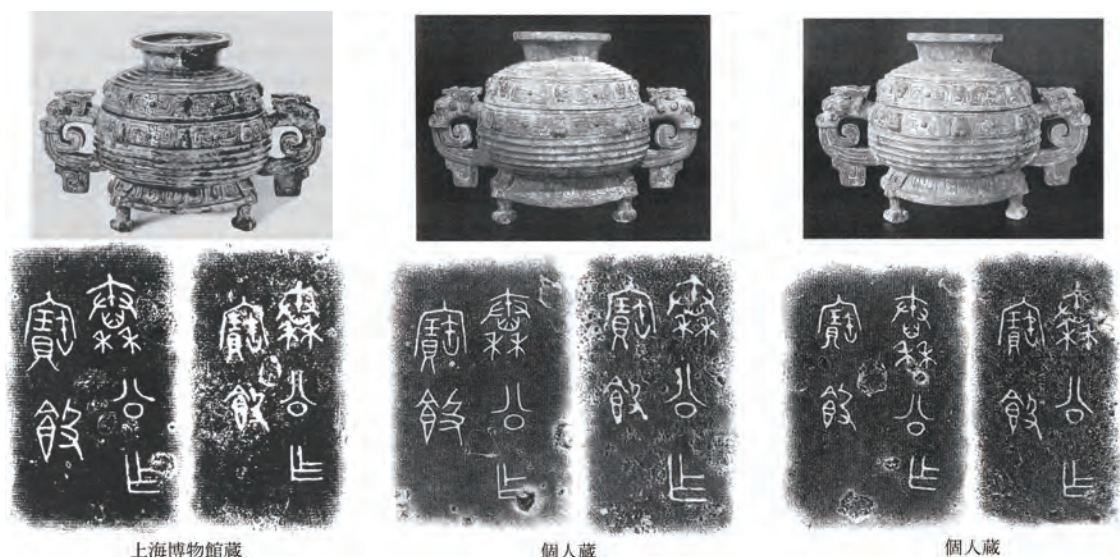


図3 秦公簋A群の銘文



図4 秦公器B群の銘文

论春秋秦国铜器生产之开始

铃木 舞（日本东京大学）

一、研究目的

众所周知，春秋各国都继承了以始兴铜器祭祀的西周王朝之礼制。秦国境内也曾经出土过很多铜器。由此可以推测，秦人也接受、继承了周礼。但我们还不太了解秦人实际上是怎样开始制作铜器的。

甘肃礼县大堡子山遗址因1990年代以来带“秦公”铭文铜器的出土而闻名，并于1994

年发现了两座中字形大墓（两墓全长分别为 115 米、88 米），所以被称之为“秦公墓地”（戴 2000 等）。关于两座大墓的墓主问题，学者们各有不同见解，即从西周晚期的秦仲至春秋早期的秦宪公或其夫人。

本文着眼于大堡子山出土的秦公铭铜器群，通过其器物、纹样、铭文的形态和其铸造技术的探讨，并与西周铜器的技术特征进行比较，对春秋秦国铜器的生产如何开始进行讨论。

二、秦公诸器之制作年代（图 1）

到目前为止，可能出自大堡子山墓地的铜器共 34 件，即 10 件圆鼎、8 件簋、7 件方壶、2 件圆壶、4 件甬钟、3 件钫。首先讨论这些铜器的制作年代。

圆鼎 西周晚期的圆鼎（图 1-①），浅腹，圆底，腹部和器底之间较有棱角。与此不同，秦公圆鼎，较为深腹，平底。其中，首阳斋藏品（图 1-②，同形器共有 3 件）与上海博物馆藏品（图 1-③，同形器共有 2 件）相比，后者底部更平。虽然两件都施有窃曲文，但首阳斋藏品的主纹高于器壁，并且主纹的外周线为很平滑的曲线。主纹周围施有小凸线的雷文。反之，上博藏品的主纹外周线扭曲，主纹内的凹线往往断续。无地文。

簋 西周晚期的簋（图 1-④），深腹，最大径位于下腹部。圆盖。反之，秦公簋（图 1-⑤以及⑥）器体的最大径位于腹部中段。器盖较有棱角。由此推测，秦公簋（上博藏以及首阳斋藏）与西周晚期簋之间有一些制作时间的差异。两件秦公簋之间也有一些形态差异。即首阳斋藏秦公簋（图 1-⑤）的器体更圆。从纹样来看，就上博藏品而言，器盖和颈部都施有窃曲纹、腹部和圈足都施有瓦纹，而且这些纹样均有立体感。反之，首阳斋藏品（图 1-⑥）仅施有无立体感的鱼鳞纹。

方壶、圆壶、甬钟、钫等其他秦公诸器和西周晚期同形器也存在着一些形态差异，即制作时间的差异。通过本节的探讨，笔者推测，秦公诸器的制作晚于西周晚期，即其制作年代为春秋早期。此外，秦公诸器之中也有早晚关系。

三、铭文之分类

所有秦公诸器均带有“秦公乍寶（用）X”或者“秦公乍鑄（用）X”的铭文。很多学者通过这两种不同的铭文内容、“秦”字的字体差异和演变、用字法的差异的探讨，都认定为两者之间有制作时间上的差异（李 2011 等）。就“秦”字而言，一种是以两个“禾”以及一个“春”为构成的，另一种是以两个“禾”以及一个“春”为构成的。为了方便，本文称前者为“秦_A”字，则称后者为“秦_B”字。在此再回到第一节探讨的在秦公诸器中看到的早晚关系，就可以知道，早期制作的圆鼎和簋都施有前者，晚期制作的圆鼎和簋都施有后者。于是，方壶、圆壶、甬钟、钫等其他秦公诸器都施有后一种铭文，即后者。本文将这些器群称为“A 群”、“B 群”。

四、秦公诸器之铸造技术

（一）器物与纹饰的制作

从铸造技术方面来看，秦公诸器有如下特征：

圆鼎 就 A 群而言，将泥土贴在模上翻成外范上的纹饰，再刻在外范主纹上，最后翻在外范上刻地纹。各纹饰的外周线很明显。反之，就 B 群而言，仅刻在模上，凹线并不平滑。在器体上也可以看到两块陶范之间的范线。

簋 A 群与西周晚期簋类似，包括其分铸技术、纹饰的立体感、外周线等器物特征。反之，B 群器物（图 1-⑥）仅于器物表面刻鱼鳞纹，与西周纹饰相比可以看到简化的现象。

方壶 在外壁（器表以及纹样）上可以看到外范之间的差异。主纹凹线往往断续，可以看到走向不太稳定。器物表面前面也可见铸孔。

圆壶 报告指出，把手和器体是分铸铆接法而连接，也无焊料连接的痕迹，与该时期常见的铸接或焊接法不同，腹部有补铸，器底上的浇注口尚无处理好（李 2004）。

罍 扉棱和龙纹均表现出立体感，与西周晚期的造型基本相同。但器壁上明显保留有合范线。

综上，A 群鼎、簋的制作技术比较齐全，与西周时期相似，B 群器物的制作技术往往表现出简化和拙劣。

（二）铭文制作

A 群同形同铭器上的铭文字体与字形基本相同，铭文周围和器壁之间没有见到段差（图 3）。反之，B 群铭文各有不同的字体，可见缺画（如“铸”字）以及倒书（如方壶）。铭文周围和器壁之间常见段差，这可能是铭文范嵌得太深而造成的（图 4）。由此可见，A 群铭文与 B 群铭文之间有识字、铭文范嵌入技术等施铭结构上的差异。

五、考察

通过上述探讨，我们可以知道，大堡子山出土的秦公铜器群产生于春秋初期，也可划分为早晚两个阶段。而且，A 群器物（即早段）的制作技术与西周时期类似，B 群器物（即晚段）则往往可以看到铸造技术上的简化或拙劣。

从此现象可以推测，A 群器物是由西周铸铜工匠而制作的，B 群器物则有可能是模仿 A 群而作的。或因为西周末期至春秋初期发生的社会混乱，A 群器物是由从西周铸铜作坊逃亡至秦国的工匠而作，B 群器物则是由秦国本地的下一代工匠制作。

致谢：中文版是由四川大学考古文博学院范佳楠讲师帮笔者修改。我特此给她表示谢意。另外，本研究是日本学术振兴会科学研究费 19K13405 的研究成果之一。

Beginning of Production of Bronze Vessels in the Qin State

SUZUKI Mai

(The University of Tokyo, Japan)

It is well known that each country in the Spring and Autumn period inherited the Zhou ritual systems, including bronze ware rituals. In recent years, within the area of Qin State, numerous tombs with many bronze wares have been discovered one after another, e.g. Yuanshanding site and the Cemetery of Duke of Qin State at Dabaozi Mount in Lixian County, Gansu Province. However, the production of Qin bronzes has not been sufficiently examined at present.

In this report, to clarify the beginning of bronze ware production of the Qin State, the authors focused on bronze ware unearthed from the Dabaozi Mount site, which is said to be the Cemetery of Duke of Qin State, and examined the date of the production and casting technique.

As a result, the following two points were clarified. First, based on the typological investigation, these bronze wares were produced the early stage of Spring and Autumn period, which was slightly after the last stage of the Western Zhou period. In addition, it can be further subdivided into two groups based on the differences in the form and casting technology of Ding 鼎 and Gui 簋 themselves and their patterns. Second, two different inscriptions cast on each bronze groups, so that, the bronzes of one group cast the inscription “秦_A 公乍寶 (用) X” (= Group A) and the bronzes of another group cast the inscription “秦_B 公乍寶 (用) X” (=Group B). Also, the casting techniques of Group A are close to those of the Western Zhou, and the shapes of the character of inscriptions cast on each bronze ware are very similar in Group A. Meanwhile, in Group B, simplification and immaturity in the casting technology were observed, and the shape of the characters also differed between individuals. There seems to be differences in the organization of casting the inscription between Group A and B.

Considering the social conditions in the late Western Zhou to the beginning of the spring and autumn period, it is inferred that Group A was a group of instruments that was produced by casting craftsman who escaped to Qin State from the bronze foundry of Zhou Dynasty during the social turmoil at that time; on the other hand, Group B was produced by craftsman in the Qin period one generation later. The Dabaozi Mount bronze ware group represents an example of the movement of the bronze craftsman from the end of the Western Zhou period to the early Spring and Autumn period and can be regarded as an example of the beginning of bronze ware production in those periods.